

(3)埋設土器

環状列石Cからは3基の埋設土器を検出している(図40)。

5SR01は環状列石Cの北側で外帯1・2の間で検出した(図48・49)。正位で埋設された深鉢で、沈線で3本1単位の文様を描いており、胴部上半に弧線文を描くものである。列石構築面に現れた口縁部のみ採取し、下部については保存している。

5SR02は内帯と外帯の間で検出した(図50・51)。口唇部が外反するし、胴部がやや膨らみをもつ深鉢で、3本1単位の沈線で、胴部に連続するクランク文を描く。口縁部のみを採取し、下部は保存している。

5SR03は環状列石東側で、外帯1と2の間で検出された(図52・53)。半裁を実施し、全体の1/2を取り上げた。埋設土器上面で土器に蓋をするように、赤礫を1点出土している。深鉢で口縁部から胴部上半に方形の区画を描く。胴部下半から底部までは無文である。

(4)焼土遺構

環状列石Cの周辺で、8基の焼土遺構を検出した(図40)。すべて列石の外周に位置している。石囲炉が4基、地床炉が4基である。石囲炉については、すでに配石遺構の項で述べた。

SN211・13SN547は重複する掘立柱建物跡に伴う。SN211は径0.4mである。

(5)竪穴住居

環状列石Cから西に40m離れた台地の縁辺において、石囲炉(13SQ407)を取り囲むように柱穴を検出した(図54)。この柱穴は掘立柱建物跡と比べて細い。

本遺構13SI569は、その下部から13SK417を検出しているが、土坑を盛土層で平坦面をつくっていることや、土層観察で漸移層が一部削平されている。黒色土中から掘り込んでいるため、明確な壁面の立ち上がりを面的に掴めなかったが、柱穴の配置と、配石遺構の内側の焼土の確認し石囲炉であることから、竪穴住居と分類した。

規模は推定径4mで、掘り込み面はⅢa層で、構築時期は十腰内1式新段階の可能性が高い。柱穴の掘り方の直径は30~40cmで、柱根の太さは20~30cmである。

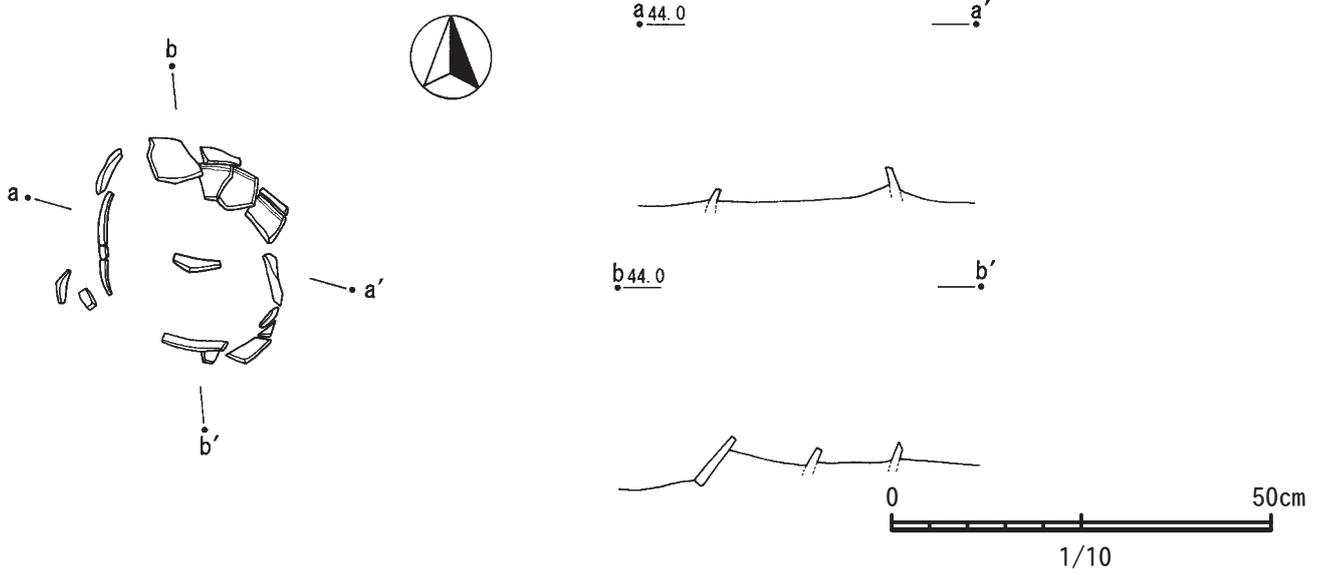


图48 埋設土器 5 SR01 平面図・断面図

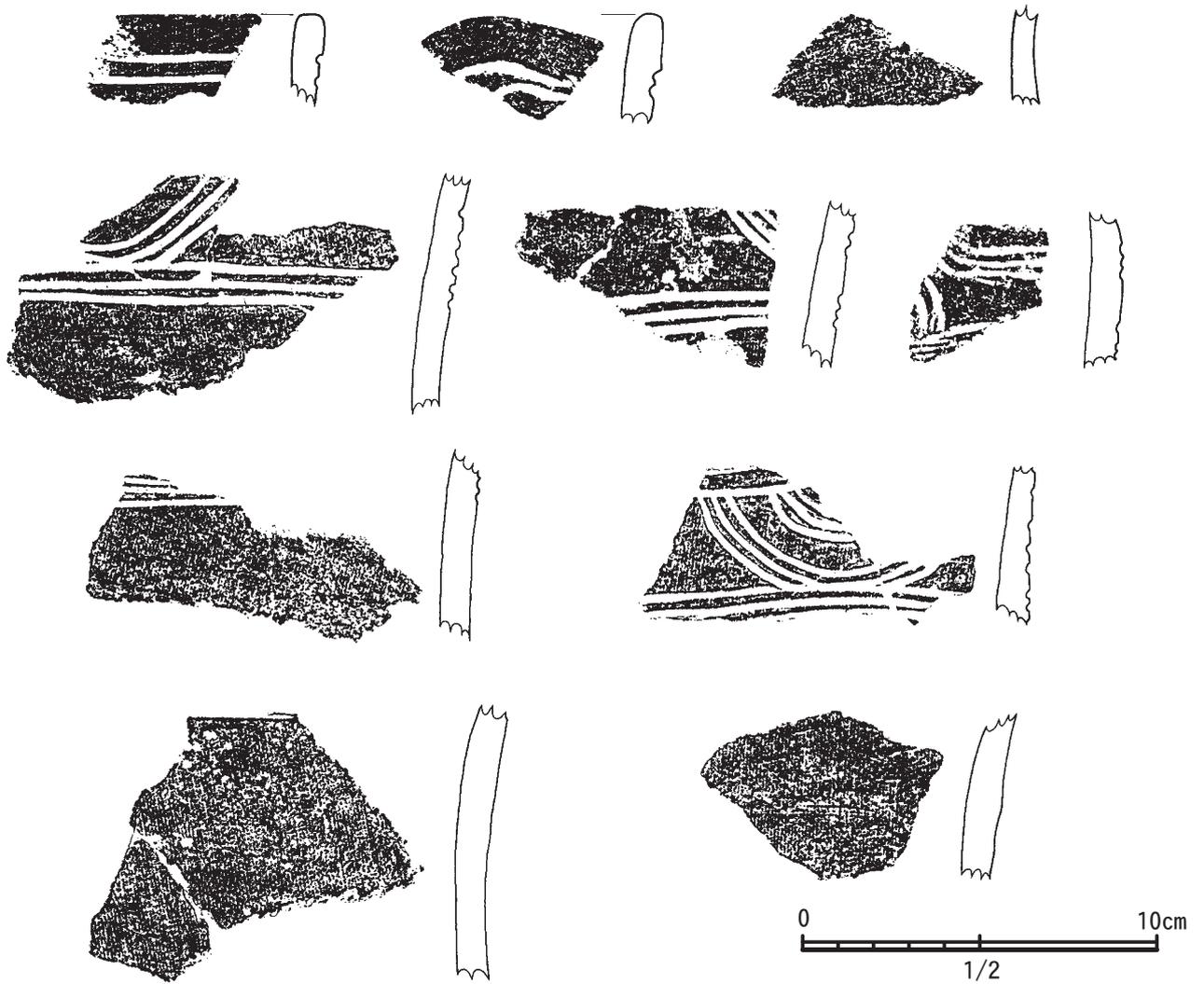


图49 埋設土器 5 SR01 出土土器

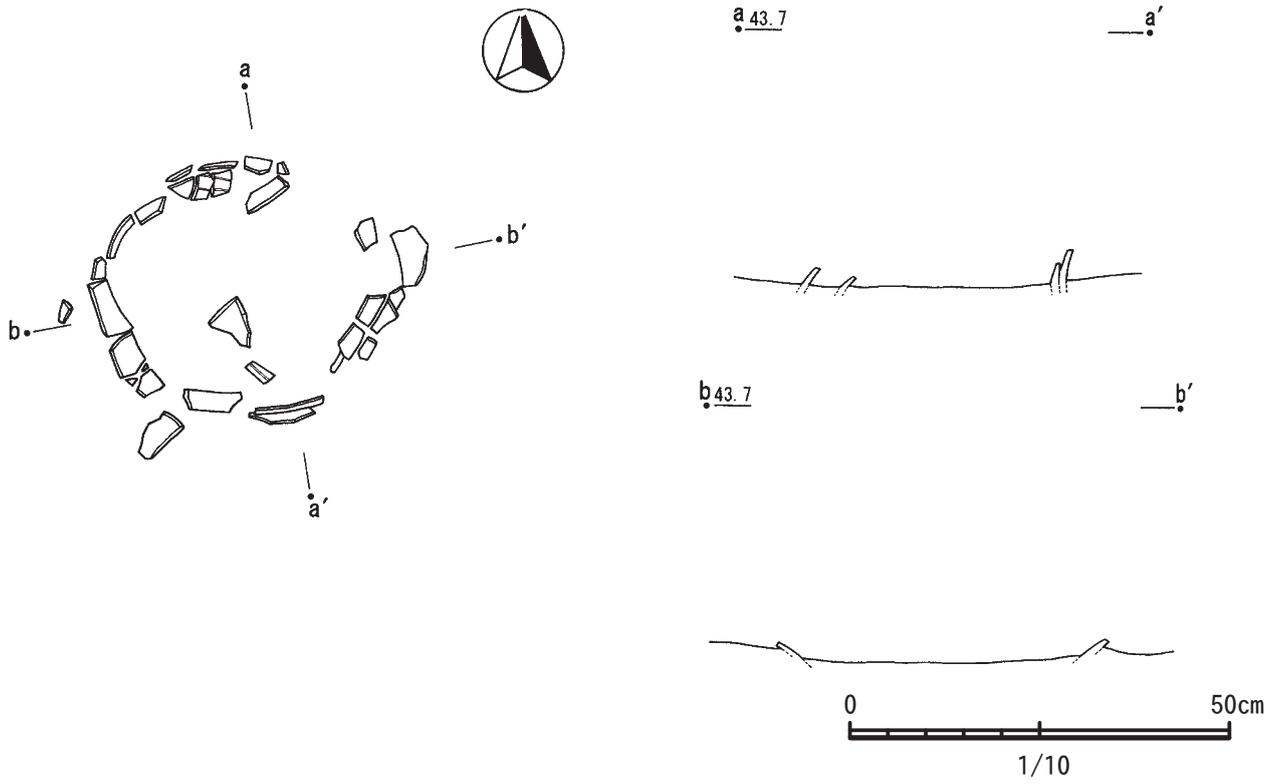


图50 埋設土器 5 SR02

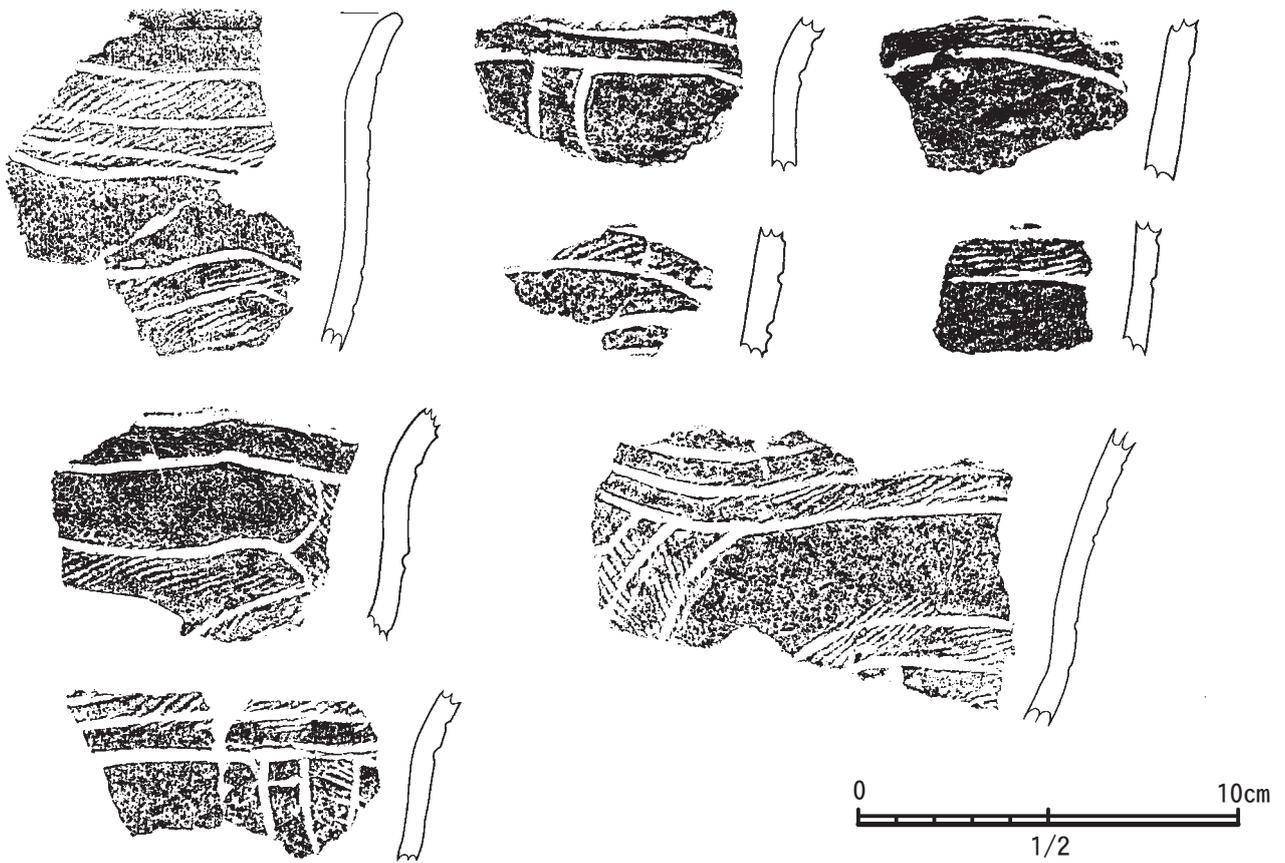


图51 埋設土器 5 SR02 出土土器

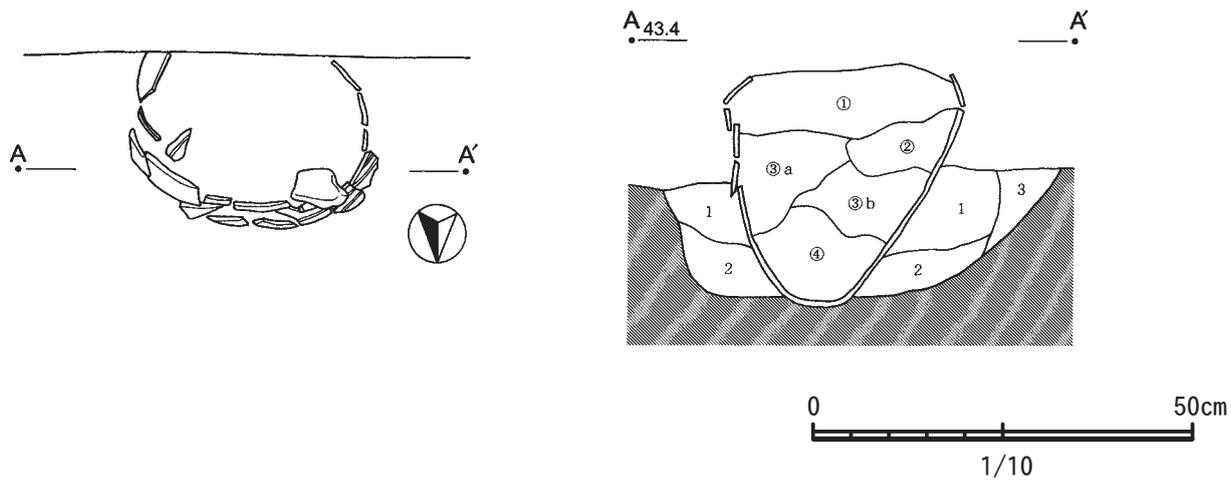


图52 埋設土器 5 SR03 平面図・断面図

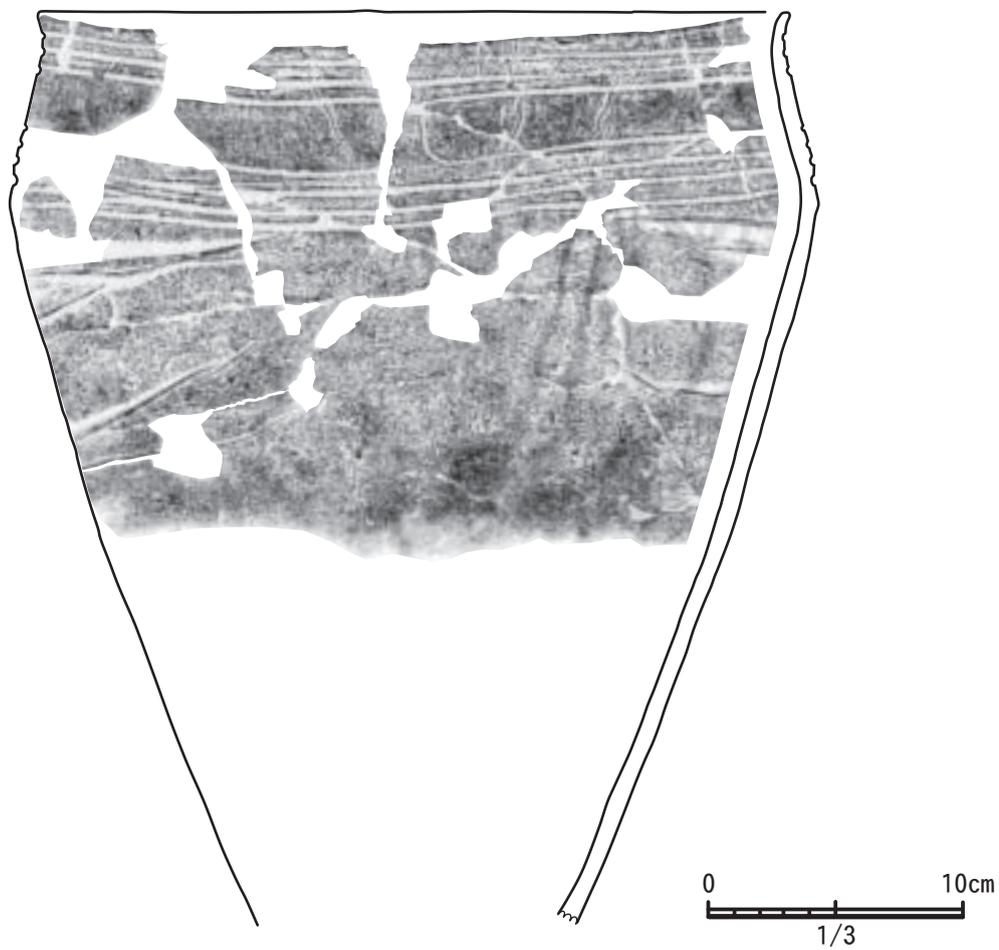


图53 埋設土器 5 SR03 平面図・断面図

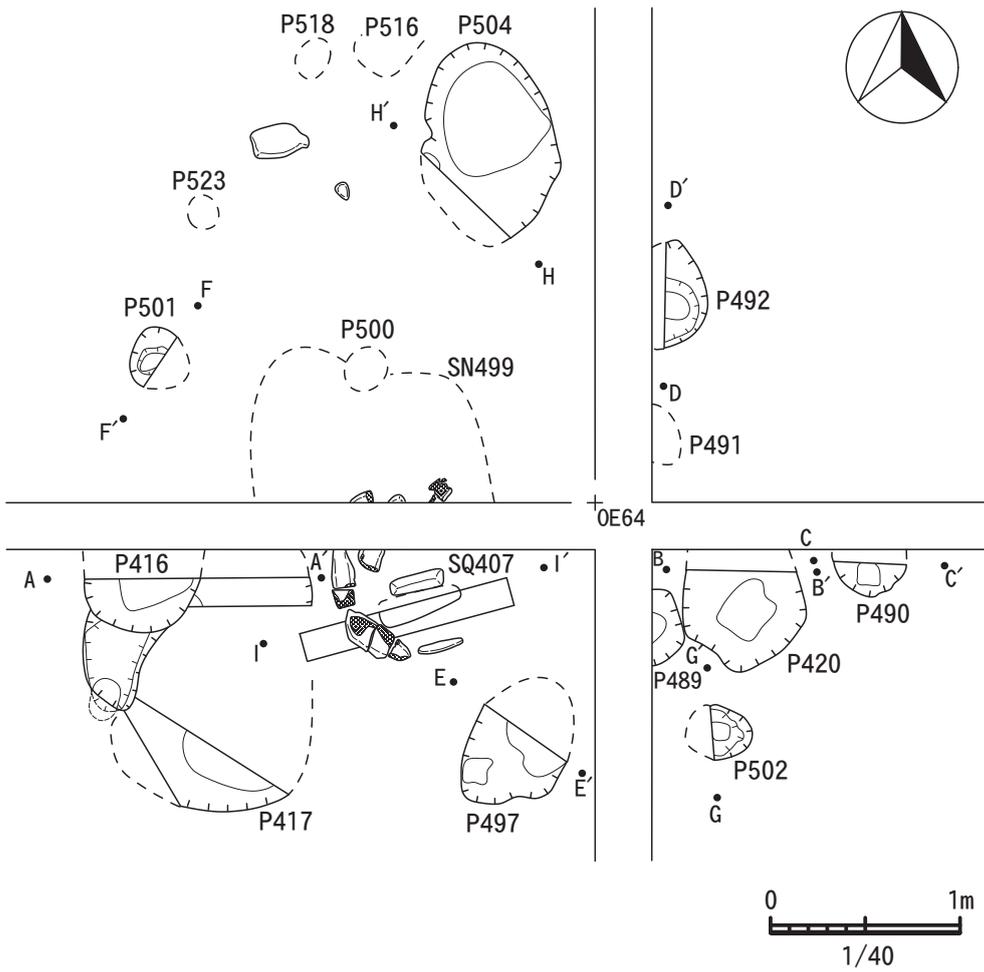


图54 13S I 569 平面图

4. 環状列石D

グリッドMR45～NG54の範囲に位置する(付図4)。環状列石Cから南東に20m離れた地点で検出され、4つの環状列石の中で最も南に位置するものである。

規模は直径36m×32mで、形状は内帯と外帯の間に2基の独立した配石遺構があり、大湯環状列石の万座や野中堂の構成に近い形状と考えられる。構成礫は547点で、石材は安山岩・流紋岩・ひん岩を主体とする20種類で構成されている。ブロックは20ヶ所に分類した(図55)。

内帯(ブロック01)は直径1.6m×1.2mの円環である。棒状礫を用いて円形にしている。

ブロック02・03が内帯と外帯の間に位置する配石遺構で、これらは内帯から東側に約9m離れた地点に集中して、検出面は環状列石と同一レベルである。ブロック02は直径1.2m×1.0mの配石遺構である。内帯と同じような棒状礫を用いて二重の配石を製作しており、内周と外周の礫で連繫していることから、円形配石の一部が抜き取られたのではなく、弧状につくられたことがわかる。内部の検出面は焼土の分布ははっきりしない。ブロック03は柱状の礫を多く用いている配石遺構であるが、杉による攪乱で原形をとどめていない。柱状礫が多用される。

ブロック04～20は外帯にあたる。全体的に拳大以下の礫が多く、石組の単位は掴みづらい。明瞭な小牧野式はみられないが、ブロック07・08・11・16は近い形状である。ブロック12は直線状の石組が2本平行しており、環状列石Aのブロック17と同様のものである。ブロック13はコ字状に横立石を配置し、その内側に親指大以下の小礫が散布された状態を確認している。鷲ノ木遺跡の環状列石外帯でも同様な集積が4ヶ所確認されている(森町2008)。放射状に配置されたブロック14は環状列石Cブロック38に近似する。ブロック17は丸礫と角礫を交互に配置し直線状の組石を形成している。

環状列石の南半分は未調査であるが、ハンドボーリング探査の成果では、南東部の構成礫の密度が少ない。

環状列石Cと同様に、列石の内側を削平し、盛土で整地を行い、礫が配置する地形改変が確認されている(図66:セクションポイントの位置は図69を参照)。環状列石の内側では漸移層がなく、地山ブロックを含んだ盛土層(M層)が形成され、礫が配置される。環状列石より外側では、基本層序IV層である黒色土が堆積していて、様相は大きく異なる。このような地形改変は現在の地形からも読み取れる。地形測量でもっとも標高の高い標高44.5mのラインは環状列石Dを避けるように囲い込む軌道を描く。10cm下の44.4mのラインとは異なり不自然な軌道を描いている。地形改変の及ばない部分は原地形が残ったため、このような地形になったと解釈できる。

サブトレンチによる列石下部の調査を行っているが、列石内側では土坑墓のようなものはほとんどない。

環状列石の周囲からは掘立柱建物跡・埋設土器・焼土遺構・土坑を検出した。

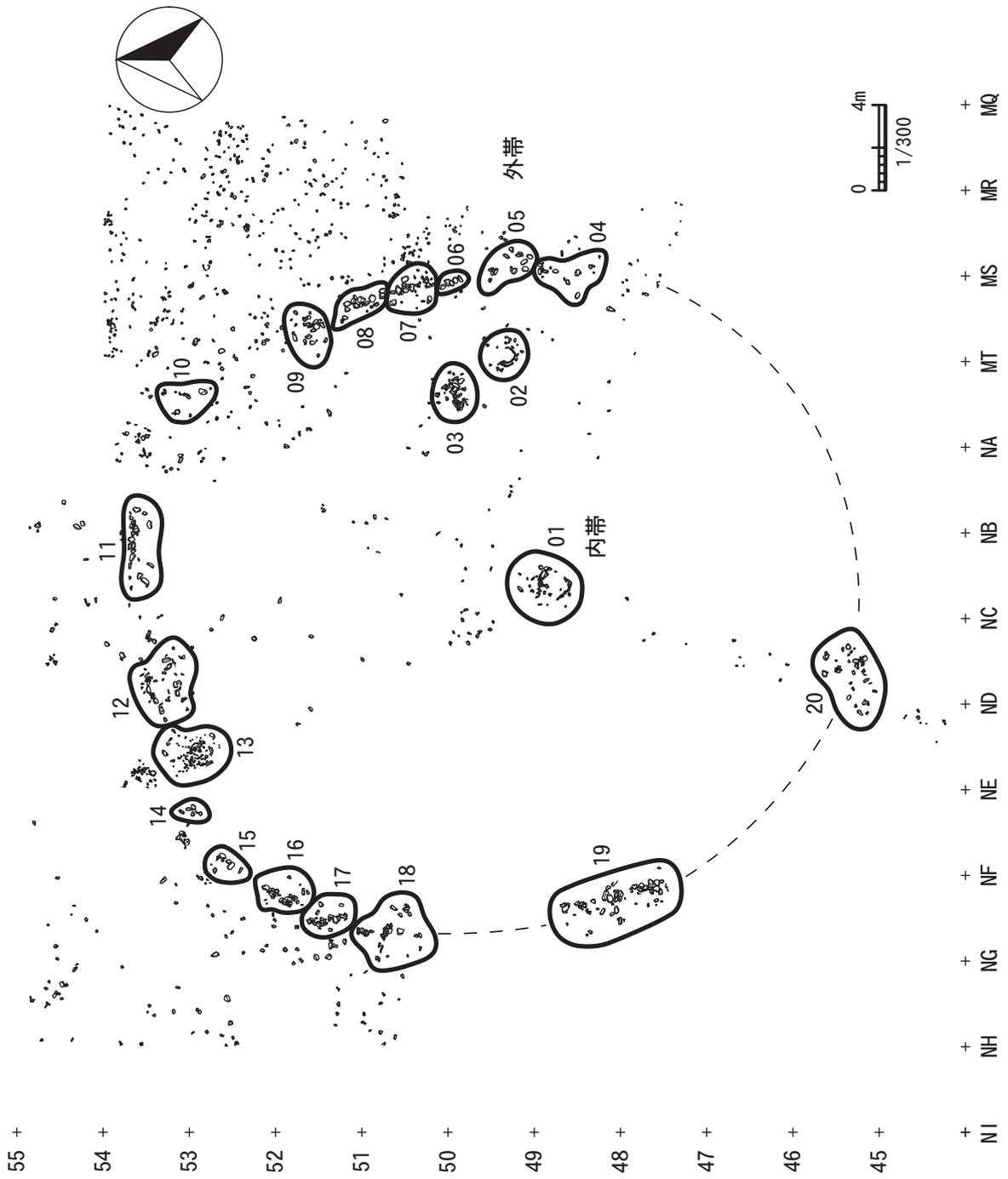
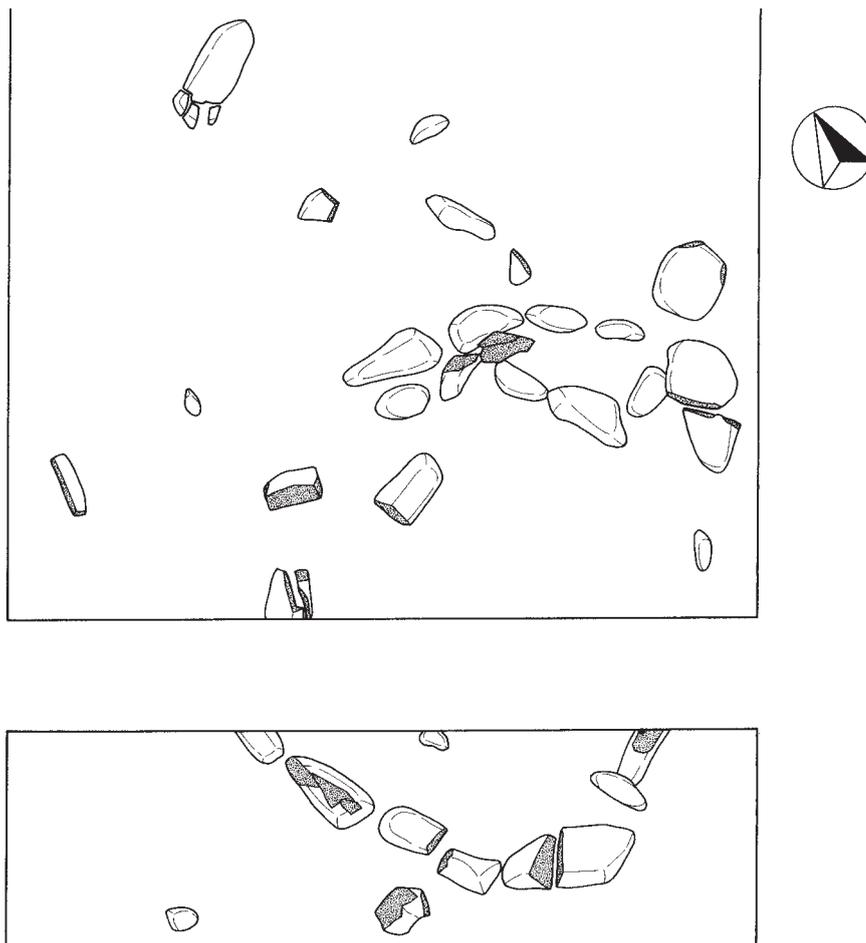


図55 環状列石Dブロック配置図

ブロック 01 (内帯)



ブロック 02 (配石遺構)

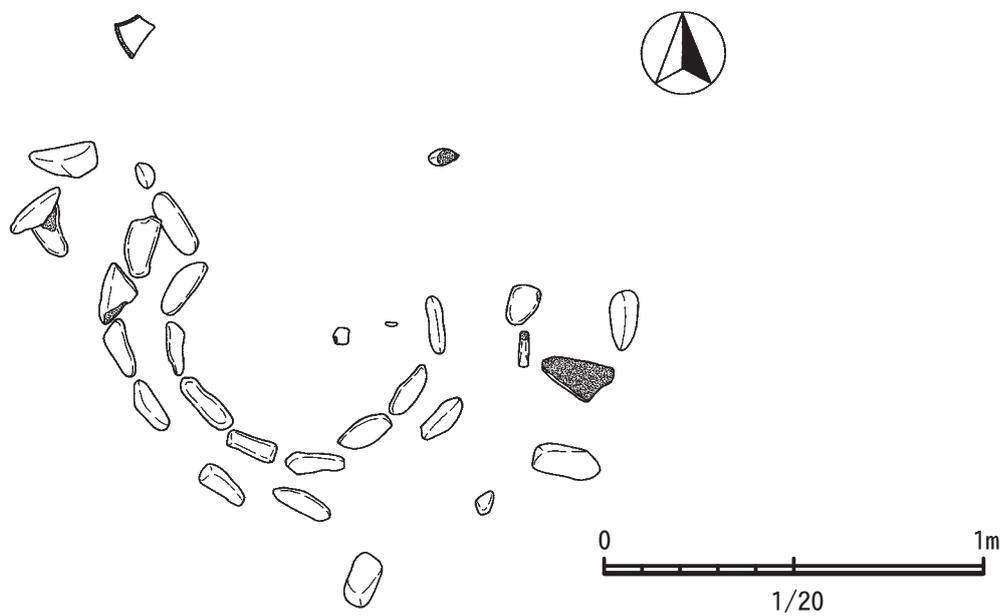


図56 環状列石Dブロック (1)

ブロック 03 (配石遺構)



ブロック 04

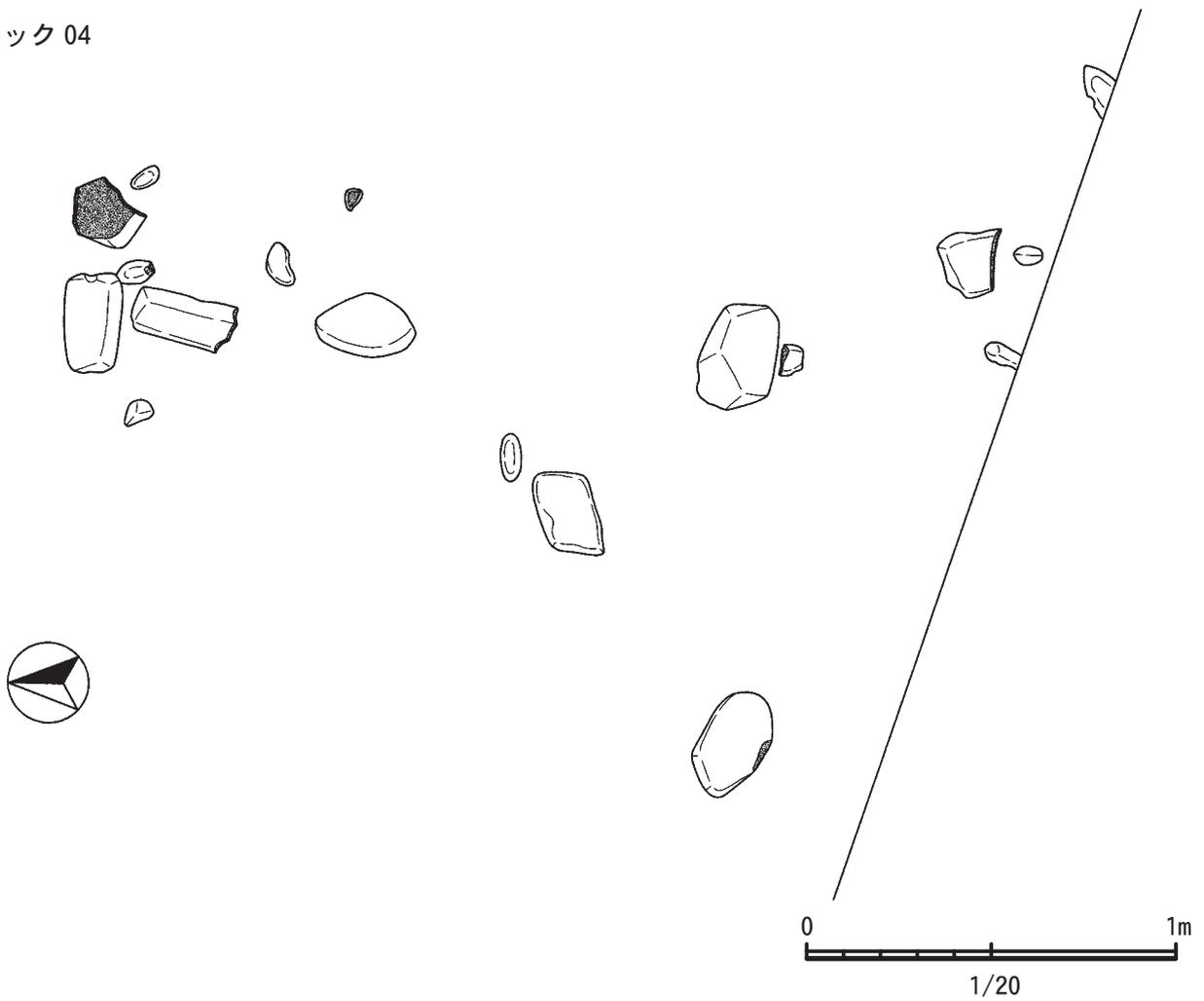
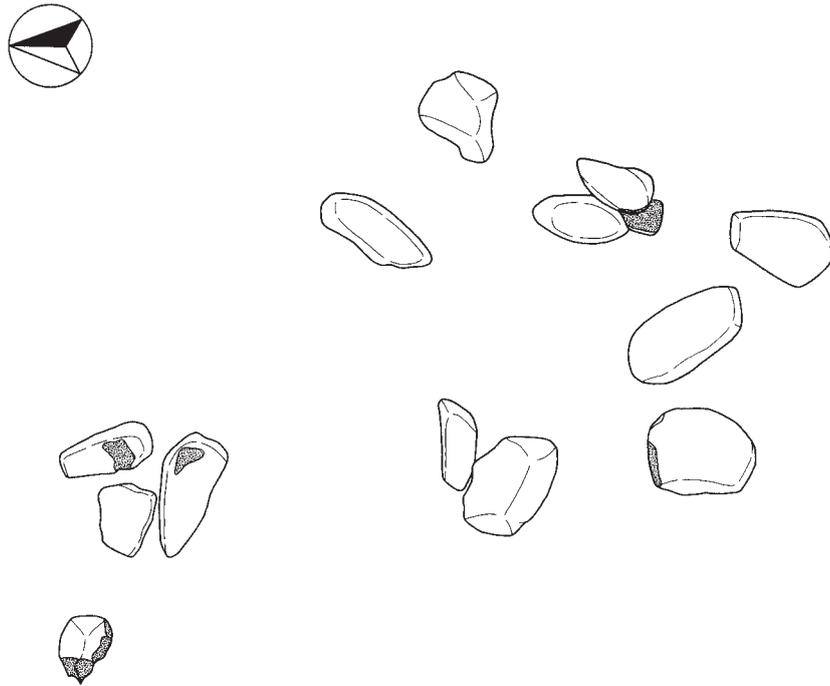


図57 環状列石Dブロック (2)

ブロック 05



ブロック 06

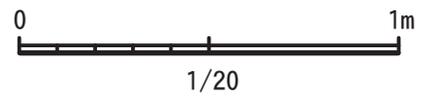
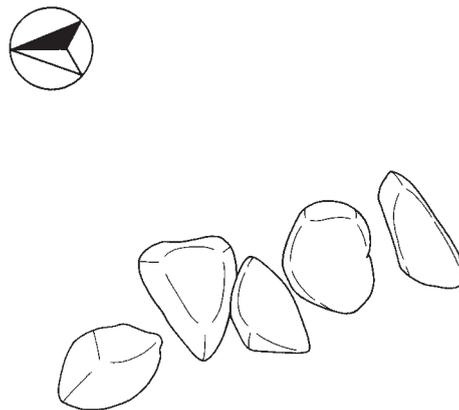
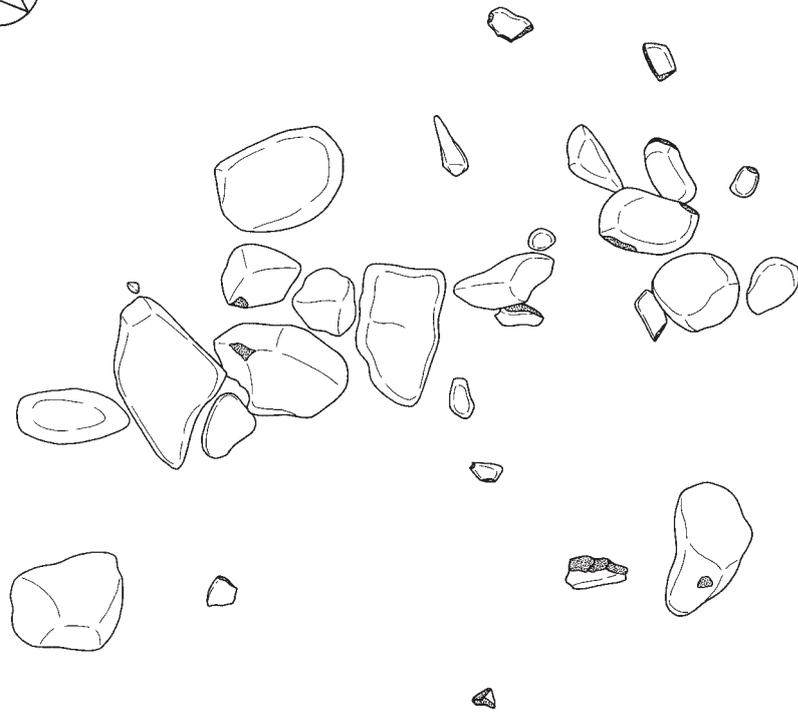


図58 環状列石Dブロック (3)

ブロック 07



ブロック 08

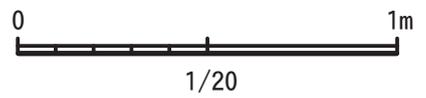
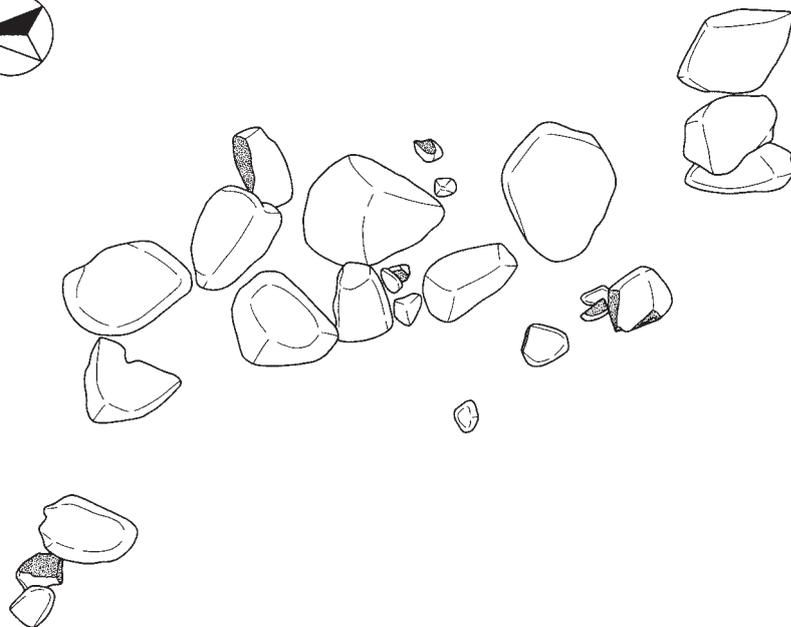


図59 環状列石Dブロック (4)

ブロック 09



ブロック 10

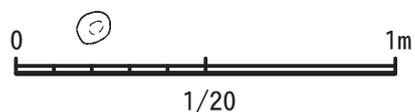
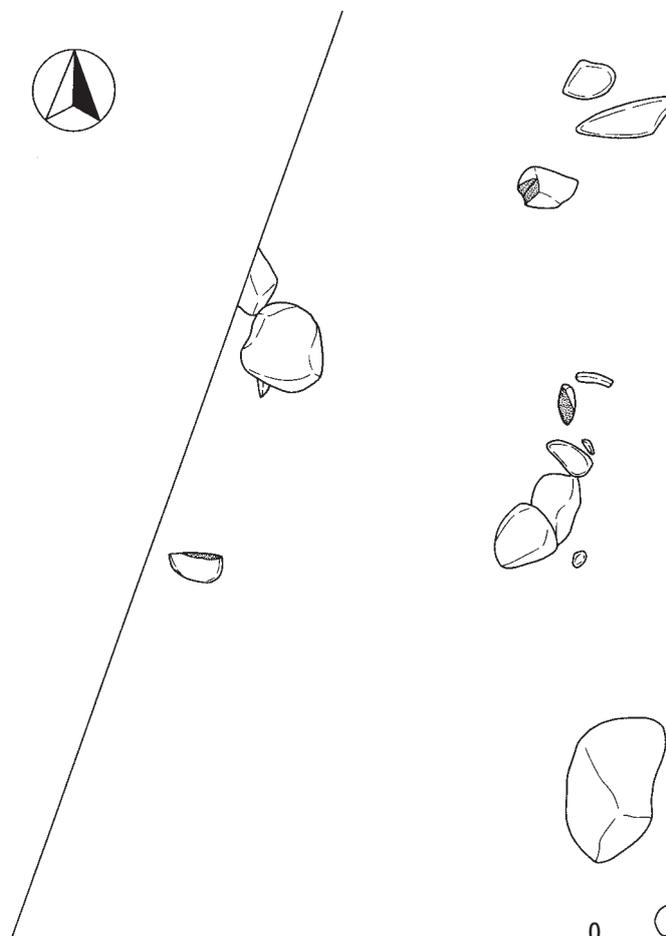
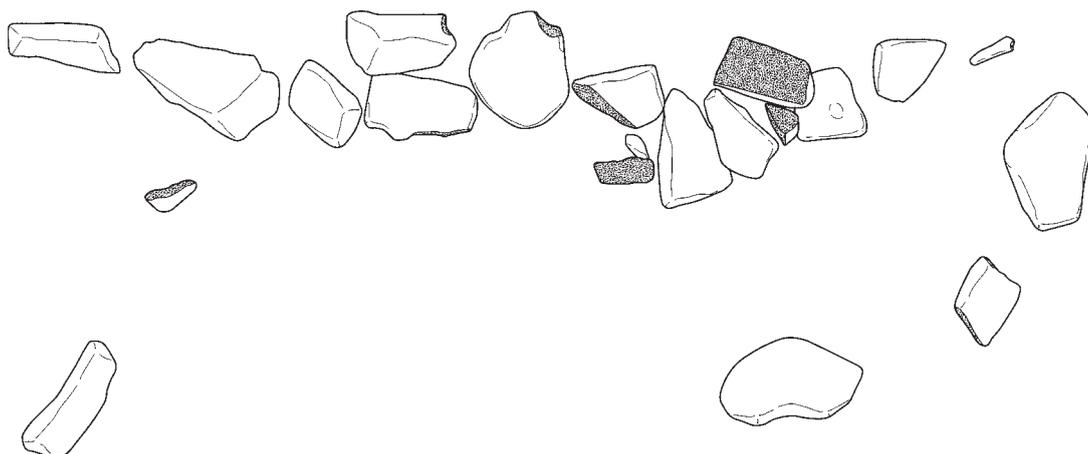


図60 環状列石Dブロック (5)

ブロック 11



ブロック 12

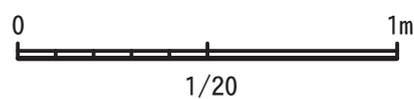
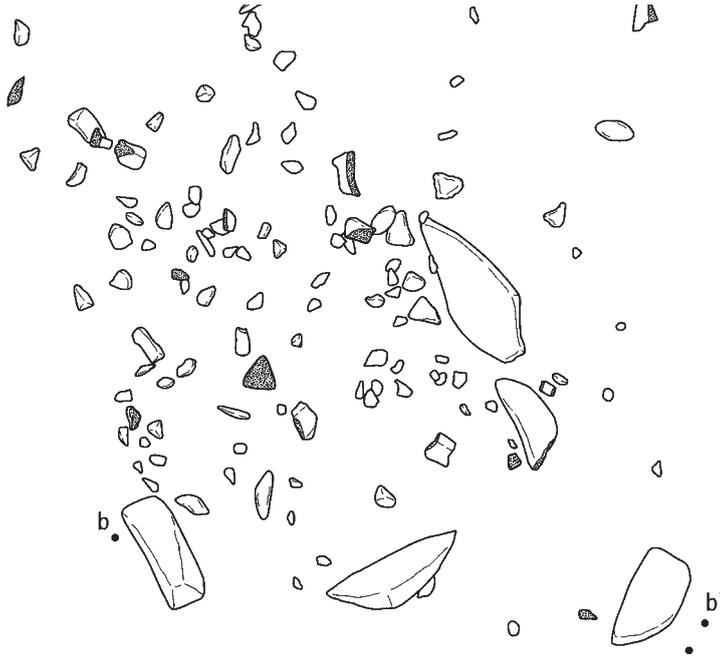
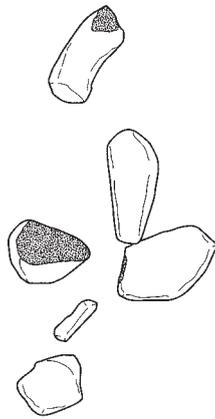


図61 環状列石Dブロック (6)

ブロック 13



ブロック 14



ブロック 15

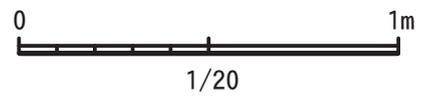
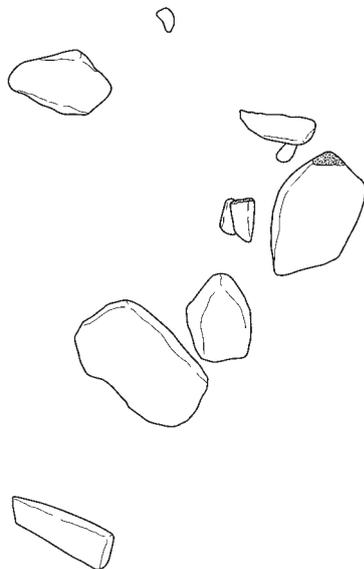
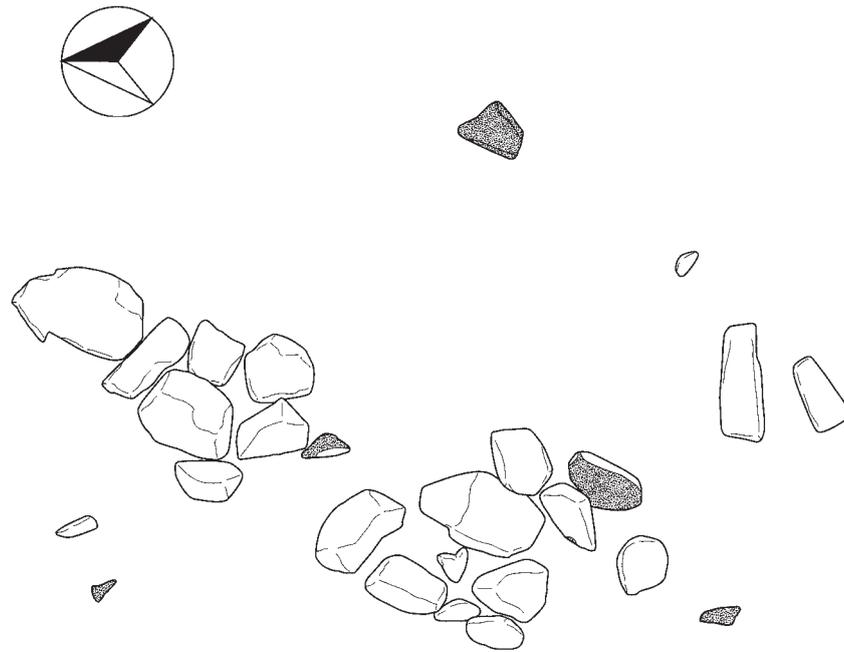


図62 環状列石Dブロック (7)

ブロック 16



ブロック 17

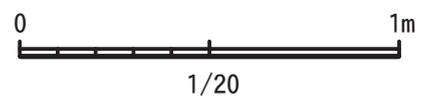


図63 環状列石Dブロック (8)